指導上の注意点

●二五一ページ

問 **「その声はさきほど来の声よりも少し弱々しかった。」（下 15 行目）のは、なぜか。**

答 エノモトさんも人魚への執着を断ち切れてはいないから。

補 人魚を運び出す際に、「ぼくだって長くそばにいればまた元に戻ってしまう。」（二五〇・下 19）とある。

●二五二ページ

問 **◉「エノモトさんの笑いを見て、人魚を離せそうな気がした」（下 11 行目）のは、なぜか。**

答 「笑い」という、人の「感情」を表す表情を見ることによって、自分の感情（人間性）を取り戻し、緊張感が緩められたから。

●二五三ページ

問 **◉人魚が「わたしだけを見ている」（上 1 行目）のは、なぜか。**

答 エノモトさんは一度人魚を離しており、エノモトさんのことはもう見限っているから。人魚が今執着しているのはわたしだから。

問 **◉「やっぱり離れられない」（上 4 行目）と思ったのに、人魚に「離さない」と言われて、「わたし」が逃げたのは、なぜか。**

答 人魚から離れないことは自分の意思によるものであり、人魚の処遇を自分で決定することができると思っていたが、人魚の言葉によって実際は人魚の方が優位にあることに気づかされて、恐ろしくなったから。

補 この言葉により、執着する、されるの立場が逆転したから。自分が人魚から離れられないと思っていたのに、実は反対で、人魚のほうが自分に執着していたことに気づき、その執着の強さに恐怖を感じたのである。

語句の研究

●二五一ページ

上 14 海岸沿いの土手には桜の並木があった。 人魚を手離す場面は、桜の花びらが舞い散る中で進行する。人魚と桜の魅力的、魔力的なイメージが重なり合う。

上 15 ひっきりなし 切れ目がないこと。絶え間がないこと。「引き切り無し」の音便。

上 15 葉桜 花が散って若葉が出始めた頃の桜。夏の季語。

上 17 うらら か 空が晴れて、日影の明るくおだやかなさま。多く春の日にいう。前出の「葉桜」が初夏を表す言葉であり、今がまさに春と夏の境界であることを示す。

下 4 せっぱつまって 「せっぱつまる」は、切羽詰まる。物事が差し迫る、全く窮する、最後の土壇場になる意。

下 16 さきほど来 先程から、少し前からの意。

下 17 目をしばたいた。 しきりにまばたきをすること。しばたたく。

●二五二ページ

上 4 誘う口調 「自分の声ではないみない」な「甘い声」のよる誘惑の言葉。人魚が「わたし」に言わせているとも考えられる。または、「わたし」とエノモトさんの執着を共有する関係性を表しているとも読める。二人が執着を捨てることも、続けることも、執着を共有することに他ならない。

下 8 「せえの」 悠長な声とあるが、人魚に魅了されている状況下では精一杯の声だろう。また、この声は「わたし」とエノモトさんが二人で出す、人魚への執着に抵抗する声である。

●二五三ページ

上 2 白磁に切れ込みを入れたような目 この表現と「赤く薄いくちびる」（上 7）という

人魚の造作が、桜の花びらのイメージと重なり合う。

キー・ポイント

「離さない」　これまで「わたし」とエノモトさんの二人の側から「離れられない、離せない」苦悩が語られてきたが、一転して、人魚の側から「離さない」と言われる。伝説上の人魚はその声に特別な力があり、美しい声で人を惑わすこともある。これまで何も話さなかった人魚のたった一言発する言葉が、強い力を持っているのである。さらにこの直後、「はっきりと響く声で、人魚は言った。」「わたしの顔を見据えて、人魚は言った。」とたたみ掛けるように反復する表現によって、人魚の言葉の衝撃を強調している。しかし、そのあまりに強烈な声の力によって、離さない主体だったはずが、執着される客体でもあるという事実が暴かれた瞬間、人魚の魔力は恐怖に変わるのである。

上12うわあ、という声が、わたしの口からもれ出た。　かつてエノモトさんも同じ声を出した。「もれ出た」とあるように、あまりの恐怖が意図せず声に変わったのだろう。叫び声なのか、つぶやくような声なのかを想像することで、この恐怖がどのような心情なのか、さらに考えを深めることができる。

下11桜が、海岸にまで飛んできていた。　桜の花びらと人魚のイメージが重なり合う場面はこれまで何度もあったが、人魚そのものが、桜が見せた幻想だったとも読める。散っていく桜は、その魔力を使い果たしていく姿のようでもある。

注意する語句

（＊で用例を示した）

歯を食いしばる…苦痛や困難・怒りなどを、歯をかみ合わせて必死にこらえる。

＊歯を食いしばり、声を抑えて泣いた。